

富山県の眼科医をつなぐ情報マガジン

創刊号

EYELINK

FREE PAPER

創刊記念
対談

林 篤志 × 山田 祐司

富山大学医学薬学研究部
眼科学講座 教授

富山県眼科医会 会長

future's eye 柳沢 秀一郎

富山大学医学薬学研究部眼科学講座講師
富山大学附属病院眼科／臨床准教授・副科長

未来を見つめて。

開業医の存在は大学病院に不可欠

山田●私たち眼科医を取り巻く環境に目を向けますと、たとえば眼科医療の外來の診療報酬が引き下げられ、受診抑制などもあつて近年、多くの眼科医が非常に厳しい経営を余儀なくされています。一方で、眼科の手術点数は上がっています。一方で、勤務医が非常に不足している現場では過重労働で悲鳴をあげているという話も耳にします。同じ眼科医でありながら、県内でこれだけの格差というか違いがある現状について林教授はどのようにお感じになりますか？

林●眼科の診療報酬はマイナス幅が大きいので、おっしゃるように開業医さんは収入減に追い込まれている現実はあると思います。ただ眼科の疾患には、開業医さんで完結できるものと、大学病院のように大きな病院でないとできない手術や、治療が必要とされる症例もあります。開業医さんでなかなか解決できないときに、わたしたち大学病院などが紹介を受けて治療を行なうわけですが、その際、術後の経過や治療後の管理を含めて開業医さんとの医療連携が非常に重要になります。こまめな情報交換や交流は患者さんも安心ですし、その点では病診連携や医師同士の信頼関係はかえって深まってきたるように感じます。大学病院の経営はいまや開業医さんの存在なくしては考えられないと思いますね。

林 篤志 山田 祐司

富山大学医学薬学研究部眼科学講座 教授

富山県眼科医会 会長



山田●診療報酬にかかわらず、医療連携が大切だという認識は開業医の皆さんは誰もが共通にもっておられます。とりわけ林教授が富山大学に着任されてから地域医療連携はよりスムーズになった気がします。それまでは患者さんを紹介してもそのままということがありましたが、今はすぐに患者さんを返してもらえます。大学病院との関係が変わったという印象を持つ眼科医さんは多いんじゃないでしょうか。

先進的な医療が行える土地柄

林●私自身の方針として、大学病院は医療圏の中で高度で専門的な医療を提供することが使命だと考えています。それは大学病院の中だけで成り立つものではありません。開業医さんや地域の拠点病院との紹介、逆紹介を通じて、顔の見える医療を展開して初めて信頼関係が深まり、双方の役割がより認識できるものだと考えます。医師同士が相互に情報交換したり、必要なことを調べたりしながら治療に生かすことはとても重要なことだと思っています。

山田●眼科医会としては、大学病院には学術的なリーダーとして、新しい治療法や最先端の医療をわれわれ地域の開業医にご指導いただき、常に新しい治療法を現場に生かしているための環境づくりを期待しています。たとえば大学と

EYE LiNK | 創刊記念対談

いま、眼科医に求められていること。

富山県の眼科医療は、ここ数年めざましい変化、進歩を遂げている。

その背景には富山大学医学薬学研究部と地域の眼科医会との連携による

先進的な医療の研究や情報の共有化などの浸透があげられる。果たして実態はどうか。

「EYE LiNK」創刊記念対談として、富山大学の林 篤志教授と

富山県眼科医会 山田祐司会長に話し合っていた。



眼科医不足を一刻も早く解消したい

眼科医会が協力して、眼科医療の最先端の研究にふれられる行事やイベントを開催することも活動のひとつです。眼科の進歩の速度は非常に早いですし、開業していると学会などに行く機会が少なく情報を得にくいのも事実。そんな中で、林教授が富山に着任されて3年近くになりますが、この間にさまざまな講演会を開いていただき、眼科医療の進化や最新の治療法に触れることができたことは私たち開業医には大きな財産です。全国の有名な先生方とさまざまな交流が図れたことは、確実に富山県の眼科医のレベルアップになっていると思いますし、目に見えて治療の成果につながっているのではないかと感じています。

林 ●そう言っていたと大変有難いですね。根本的に、大学病院と開業医さんとの間に信頼感がないと成り立たないと思います。医療連携にしても学会や講演会を開催してもすぐに目に見える効果となつてあらわれるものではありません。わたしは、富山に着任した当初から真面目な患者さんが多いと思いましたし、医師を信頼してくださるので、先進的な医療を行いやすい土地柄だと感じました。そうした面は開業医さんとの信頼関係を築く上でも大いに関係していると思います。

山田 ●開業医の立場からすると、一人で行っている人が多いのでなるべく危険が伴う治療はしたくないですし、難しい治療はできないのが現状です。できるかもしれないけど、リスクの高い治療はなるべく大学病院に紹介する。そういう開業医は多いと思います。

林 ●大学病院の基本的なスタンスは、紹介された患者さんは必ず受ける。そこに開業医さんの意図されているものが何かを読み取って治療することを心がけています。富山県の現状はわたしが必要だと感じる勤務医数の6割くらいしか充足できていないのではないのでしょうか。大学病院は医療機関であると同時に教育機関でもありますので、若い新人医局員を眼科医として一人前になるように訓練し、一人でも多くの勤務医を県内の医療機関に供給していく役割も担っています。

山田 ●眼科医会の会員は富山県全体で110余人ほどです。開業医と勤務医がほぼ半々くらいの割合になっています。最近は大学の同門会を通じて開業医と勤務医が親睦や交流を図ったり、若い先生方の意見を聞く機会も増えてきています。医会のなかに「勤務医部会」というのがあって勤務医の集まりがあります。皆さんの意見を聞くとつくづく大変だと感じます。時間外の患者さんが多くて自由時間がとれないとか、女性の勤務医さんは

眼科医というのは、
学ぶべきこと、
経験しないといけないことは
山ほどあります。

山田祐司

山田祐司

富山県眼科医会 会長

やまだ・ゆうじ

昭和27年 富山県富山市生まれ

昭和51年 三重大学医学部卒業 三重大学眼科入局

昭和51年～54年 三重大学附属病院眼科勤務

四日市市民病院勤務

昭和54年～60年 富山医科薬科大学附属病院勤務

講師にて退職

昭和61年 山田祐司眼科医院開院現在に至る。



いま、眼科医に 求められていること。

林 篤志 × 山田祐司



子育てや家庭を犠牲にしているとか、全体的に忙しすぎてなかなか自分の時間がとれないし、もてない。なんとかしたいけど誰に相談すればいいのか、どこに言えればいいのか、言う場がない。なかにはそれで開業したという先生もおられます。会長という立場上、なんとかしてあげたいのですが、どうすればいいか私自身もなかなか方法がみつからない。

林 ● いやまったくその通りです。大学病院も同じ状態で、みんな過重労働になっています。大学の場合は、さきほど言いましたようにある程度は仕方がないけど、結局、個人のマンパワーでカバーするしかない現状は、一刻も早く解消したいというのが本音です。多少しんどくても仕事が楽しくなるようなことを考えていけないと、自分の興味もてる研究はなかなかできませんからね。

診察能力と手術能力が問われる

山田 ● 眼科医というのは、学ぶべきこと、経験しないといけないことは山ほどあります。開業してあらためて思うことです。が、眼科医として今後すべきことは、大学を卒業して医師免許をとってから10年くらいは勉強したほうがいいということです。自分の経験から考えても、専門だけをやらばいいと思いますが、開業してしまうとそれ以外のことはなかなかできなくなります。大学病院はいろんな患者

林 篤志

富山大学大学院 医学薬学研究部（医学）
眼科学講座教授

はやし・あつし

昭和63年 大阪大学医学部卒業

昭和63年 大阪大学眼科に入局

昭和63年～平成元年 大阪大学医学部附属病院眼科 研修医

平成元年～3年 松山赤十字病院眼科 勤務

平成3年～5年 東大阪市立病院、大阪府羽曳野病院 眼科勤務

平成5年～6年 大阪大学医学部眼科 シニア医員

平成7年～9年 ジョンズホプキンス大学

ウィルマー眼研究所 Research fellow

平成9年～12年 大阪大学医学部眼科 助手、学内講師

平成13年～18年 医療法人 明和病院 眼科部長

平成18年～19年 カリフォルニア大学サンフランシスコ眼科

Associate Adjunct Professor

平成19年10月 富山大学 眼科学講座教授就任。

眼科医同士の連携や
情報交換に役立つと同時に、
診療にもつながる情報を
配信していきたい。

林 篤志



いま、眼科医に求められていること。

林 篤志×山田祐司

さんが紹介されてきますし、できるだけ得意分野、不得意分野わけはだてなく経験しておいた方がいいと思いますね。

林 ●診療機器がどんどん進歩して、近い将来、一つの器械に患者さんが顎を乗せれば目の情報がすべてデータ化され、数値化され、器械で自動診断できる時代が来ると思います。そうなると眼科医に何が求められるかというと、診察能力と手術能力です。患者さんと向き合ってきた人と話を聞いてどこが、どう悪いのか診察できる能力が大切になります。同時に、手術だけは機械がどんなに進化しようとも人間の手でやらないといけない。だから手術がうまい眼科医はますます重要な存在になっていくと思います。眼は見えないとQOLが低下しますし、社会的損失も大きい。それを守る眼科医の貢献度は世間で余り認識されていないように思います。

山田 ●10年後、眼科医がどうなっているかを考えると、おそらく比較的簡単な治療は眼科医の手を離れているんじゃないかという気がします。逆に専門医として生き残っていくには最先端の技術をもっていないといけない。そのあたりの感覚は私たちが勤務医をやっていた時代と全然違います。そういう変化に対応していく意味でも、大学で基礎をみっちり学んでおいたほうがいいと個人的には思います。

林 ●富山県の開業医さんは皆さん勉強熱心でいらつしやる。最新の知識をわれ

われと共有できるだけの研究は皆さん積んでおられると感じます。とはいえ大病院は、患者さんにとっては最終病院なのですべての分野で専門的な治療をめざしていく姿勢は今後変わりません。

行政も含めた県全体で取り組む

山田 ●先ほど眼科の進歩は激しいと言いましたが、最近はネットの普及などもあって患者さんも勉強しています。当然、そのなかでわれわれ開業医も進歩していかなくてはならない。手術はもちろんですが、診断面で最低でも診療機器を使いこなせないと病気の理解を深めることはできません。新しい薬も毎年のように出てきていますし、先ほど教授がおっしゃったように手術も進歩してきています。開業医もそれにあわせていくことが重要です。大病院と提携して学術会議などを出るだけ開いていただいて、われわれ自身の頭の中を進歩させていくことが大切だと考えています。

林 ●医療連携についてはこれまで通り緊密に進めていければよいと思っていますし、わたしは開業医さんを含めた富山県のお眼科医のレベルはかなり上がってきていると率直に感じています。ただ、大学の診療はまだマンパワーが不足していることで十分に診療面の充実を図れていないですし、新しい人の教育を含めて医師不足の問題は急がないといけないと思っています。医

療、研究、教育も含めて学術的に先端であることが大病院の存在意義だと思いますし、それが充実して初めて医療圏の中心病院、最終病院としても機能していると思っています。マンパワーの問題は大病院だけではなく解決できない部分もありますので、行政にもぜひ要望していきたいところです。

山田 ●眼科医会としてもまったく同感です。今後、わたしたち医師も高齢化していきますので、今の眼科医療を今後富山県下だけで賄っていけるのかどうか、大学の眼科がどうなっていくかという問題と大いに関連します。ぜひとも行政にもご支援いただけるように要望したいところです。

林 ●今回はじめて「EYE LINK」という、わたしたち眼科に特化した情報誌が出るようになったのは非常に価値あることだと思います。眼科医同士の連携や情報交換に役立つと同時に、診療にもつながる情報を配信できたらいいですね。

山田 ●そう思います。客観的な視点が加わることで、医師だけではなく一般の人にも見ていただけたらいいですね。今後とも期待しています。E

網膜硝子体の分野で高い治療実績

富山大学附属病院の眼科外来は、網膜硝子体緑内障、ぶどう膜、角膜、斜視弱視・小児眼科、眼瞼・涙道・眼窩、網膜色素変性などの専門分野があり、疾患に応じて内科や小児科、脳神経外科なども連携、それぞれの分野で大学病院のメリットを生かした先端的な治療を行っている。

なかでも富大附属病院がとりわけ得意としているのは、網膜硝子体の分野である。網膜剥離、糖尿病網膜症、黄斑円孔、黄斑上膜などの手術治療をはじめ、加齢黄斑変性、静脈閉塞症などの薬物療法、レーザー治療、眼外傷などの救急疾患などにも幅広くかつ迅速に対応している。

網膜硝子体の治療は、大きく分けて手術が必要な外科的治療と、内科的なものに大別される。手術は全例で小切開手術

外来処置

平成22年度
網膜静脈分枝閉塞症、網膜中心静脈閉塞症、近視性脈絡膜新生血管に対するアパスチン注射：386件

加齢黄斑変性
硝子体注射（ルゼンティス、マクジェン）：238件
PDT（光線力学療法）：100件

手術

平成22年度手術件数 1327件
網膜硝子体手術 386件

網膜剥離 87（バックリング 18）
黄斑円孔網膜剥離 5
黄斑円孔 29
PVR（増殖硝子体網膜症） 16
ERM（黄斑前膜） 54
DM（糖尿病網膜症） 65（PDR；増殖糖尿病網膜症 37）
RVO（網膜静脈分枝閉塞症、網膜中心静脈閉塞症） 18
VH（硝子体出血） 18
眼球破裂 4

DEPARTMENT OF
OPHTHALMOLOGY,
UNIVERSITY OF TOYAMA.



future's eye

先端的な治療と質の高い医療で 地域との医療連携を深める。



白内障などの一般的な疾患から
小児眼科、神経眼科、悪性腫瘍などの特殊な疾患まで
すべての眼科疾患に対応する富山大学附属病院の眼科では、
大学病院の利点を生かした先端的な治療で高い実績をあげている。
とりわけ網膜硝子体の分野では、抗VEGF抗体を使った
加齢黄斑変性の新しい治療で症例を重ねるなど
質の高い専門医療の提供をめざしている。

富山大学医学薬学研究部眼科学講座講師
富山大学附属病院眼科／臨床准教授・副科長

柳沢 秀一郎

を行っており、低侵襲で早期の社会復帰が可能な治療を推進している。ちなみに網膜剥離の初回復率は約95%、最終回復率は100%を達成しており、術後管理を含めた患者のQOLの改善に配慮した、体にやさしい治療として評価が高い。

内科的な治療として、最近のトピックとしてクロースアップされているのが加齢黄斑変性に対する、抗VEGF抗体の硝子体注射と光線力学療法を併用したコンビネーション治療である。

抗VEGF抗体と 光線力学療法の併用

加齢黄斑変性は、日本人には比較的小さい疾患と考えられてきたが、欧米では成人の失明原因の第一位。高齢化と食生活の欧米化などに伴ってここ数年目立ってきされており、これまで有効な治療法が少ないとされていた。しかし近年、抗VEGF抗体と光線力学療法を併用することで、病気の進行を抑えたり、改善が見られるようになってきている。治療にあたっている柳沢秀一郎臨床准教授が説明する。

「滲出型の加齢黄斑変性にはいくつかの治療法がありますが、脈絡膜新生血管の拡大を抑え、視力を改善することが治療のポイントになります。脈絡膜新生血管の発生には、血管内皮増殖因子（VEGF）が大きく関係していると考えられており、そのVEGFを阻害することによって脈絡膜新生血管を退縮させる治療法が有効とされています。現在、マクジェンやルゼンティスといった抗VEGF抗体が、加齢黄斑変

性のみに保険適用されています。治療法はこの抗VEGF抗体を硝子体に注射するのですが、現状では1カ月毎ごとに何回か注射を行う必要があります、患者さんへの負担も大きいことから、これを光線力学療法(PDT)と組み合わせることで硝子体注射の回数を減らすことができています」

柳沢臨床准教授の研究グループでは、網膜静脈閉塞症による黄斑浮腫に対しても抗VEGF抗体の注射を積極的にやっているほか、黄斑円孔の治療についても、患者への術後数日のうつ伏せを要した時間を短時間に抑える治療法を導入、苦痛を和らげるよう努めている。さらにOCT(光干渉断層計)などの最新機器を使って、手術中の網膜の変化を捉えるなどの先端的な取り組みも行っている。

高まる地域医療連携への期待

柳沢臨床准教授の研究グループでは、黄斑疾患のより良い治療法の開発に努めており、今後、加齢黄斑変性の治療の選択肢がさらに増えることも予想される。その一つが、VEGF・Trapという治療法である。「VEGFの受容体には膜型と可溶性のタイプがあります。可溶性のレセプターを人工的に作成、投与し、それによりVEGFの作用を抑えようとするのがVEGF・Trapで、現在、治験中の段階です」

眼科領域は、疾患によって小児科や内科、脳神経外科との連携が必要不可欠。大学病院のメリットを最大限に生かした最新の



柳沢 秀一郎

やなぎさわ・しゅういちろう

1995年 富山医科薬科大学医学部医学科卒業(現:富山大学)
1995年 富山医科薬科大学附属病院眼科 研修医
1996年 糸魚川総合病院眼科 医師
1997年 富山医科薬科大学附属病院眼科 助手
2003年 富山医科薬科大学附属病院眼科 講師
エール大学眼科在外研究員
2010年 富山大学附属病院眼科 臨床准教授 副科長

治療を積極的に取り入れることで、専門性の高い治療を提供できる。それは結果的に、富山大学附属病院の眼科が地域の拠点病院や開業医との病病連携、病診連携をより太く、強くすることにもつながるといえる。

「大学病院が最新の治療法を積極的に取り入れることで、地域の医療機関と紹介、逆紹介のネットワークがより強固になっていくと考えていますし、結果的に患者さんにとっても快適かつ最善の治療の提供につながると思います。今後とも地域の先生方と合同カンファレンスや研修などの場を通して、最新の研究や情報を共有しながら新しい治療法の開発に力を入れていきたいですね」

最先端の治療で地域医療連携のネットワークをさらに深める。富山大学附属病院の眼科がめざす地域医療連携への期待はますます高まっている。E



松本眼科医院

〒937-0067 魚津市釈迦堂1-11-5
TEL. 0765-23-1200



わがまちの① 眼科を訪ねて——

研究漬けの米国留学生活

私

が魚津市で開業したのは、平成16年3月です。以前所属していた大学病院では、遺伝性眼疾患の基礎的・臨床的研究に力を注いでいました。一年間の米国留学では、研究漬けの毎日を送り充実していました。一転して帰国後は、研究をする余裕もなく、もっぱら診療に追われる日々を過ごしました。そんな中、いろいろな人との出会いがあり、帰国3年後に開業する決意をしたのです。

魚津市の人口は約4万5千人です。JR魚津駅から徒歩5分、魚津市役所の前という好立地で、とても交通の便が良いところです。このため、電車やバスで遠方より来院する患者さんが年々増えていきます。漁業や水産加工が盛んな土地で、季節になるとカニの殻が目に入ったり、クラゲが目に入ったりという患者さんが時々いらっしゃいます。

患者さんの満足度向上のために

当院は4床のベッドを有しており、主に白内障手術を1泊入院あるいは日帰りで行っています。いち早く導入したOOLマスターによって、術後予想屈折値が正確に計算でき、白内障手術を受ける患者さんの満足度を向上させることができました。一方、網膜硝子

体疾患の外科的治療が必要な場合は、富山大学病院や県立中央病院に紹介しています。2年前に導入したOCT(光干渉断層計)のおかげで、黄斑疾患の経過観察を詳細に行え、また紹介するタイミングをよりの確に判断できるようになりました。

地域に必要とされる医院作り

私の経営理念は、患者さん本位の優しい医療です。来院する患者さん全員に満足してもらえよう、丁寧な診療を心がけています。また、待ち時間短縮のために、スタッフ全員がきびきびとした動きを実践しています。これからも地域から必要とされる医院作りをしていきたいと思っています。



院長 松本 真幸

まつもと・まさゆき

富山市出身。
富山医科薬科大学医学部卒、
同大学院博士課程修了。
その後、富山医科薬科大学病院、
厚生連上越総合病院、
クリーブランドクリニック
(文部省在外研究員)を経て、
平成16年3月開業。医学博士。



PROFILE

高岡市民病院眼科

宮腰 晃央

みやこし・あきお

1980年、富山県高岡市生まれ。
富山大学医学部卒。
富山大学附属病院で
初期臨床研修後、
富山大学眼科入局。
平成22年4月より
高岡市民病院眼科に配属。

ミライの眼科医

富山県内で明日の眼科医を目指して日夜がんばっている研修医のみなさんを紹介していきます。

『常に誠意を持って患者さんに接していきたい。』

眼科を志した理由…

学生時代に眼科学に最も興味を持ったからです。また、診断から治療まで行え、その責任感とやりがい、非常に魅力を感じたからです。

眼科医をやっていて良かったと思う事…

やはり、白内障手術の翌日に眼帯を取った瞬間「明るくなった」と言われた時です。
今後目指す所は（目標など）…患者さんからも、他の先生方からも困った時に頼りにされるような眼科医になりたいです。まだまだ道のりは険しいですが…。

患者さんに対して日頃どのように接しているか…常に誠意を持って接するように心がけています。「満員電車が急停車をした時、何が起こり、解決まであとどれくらいの間がかかるか」ということを場内アナウンスで説明すれば、状況がどれほど悪くとも乗客がパニックになることはない。患者とはまさにそういう状態である。」このような内容の話を最近、学会で聞き、印象に残っています。まだまだ診断・治療の能力が未熟な自分にとって、的確で丁寧なアナウンスを提供することだけでも、患者さんへの誠意につながるのではないかと考えています。



わたしの オススメ。

Recommendation!

蕎麦、季節料理

【蕎文きょうぶん】

高岡市下島町181-1 tel. 0766-25-2570
<http://www2.tcnet.ne.jp/an-an02/kyoubun.htm>



齊藤 周子

齊藤眼科医院
富山県高岡市

高岡に「蕎文」という蕎麦屋があります。ご主人の今井さんは優秀な木工家具職人で、家具も作るし、蕎麦も作る。そして家まで作るというすごい方です。蕎麦がすごくいいのはもちろんですが、夜は予約をすれば蕎麦会席、季節料理を戴くことができます。

12月中旬、呉西地区の熟女医5名で「蕎文」の「鴨鍋」を堪能してきました。この時期の真鴨は、ほど良く脂がのり、脂身の甘さとしっかりとした肉の歯ごたえが独特の深い味わいがあります。利尻昆布でじっくりとった出汁に鴨のうまみと厳選された野菜たちの香味が鍋の中でハーモニーを奏でます！さらにそのうまみをたっぷり吸った生麩、こんにゃくがしっかり味を再現。鍋汁は最後まで煮汁が濁らず旨みが益々濃縮されたところで、メにはそれをつゆとして打ちたてのそばを戴きます！まさに絶品！でした。とことん厳選した素材、それに向かうご主人の気合、技、演出。食後には、えも言われぬ満足感がわきあがってきます。心身ともに広がる満足感です。

この店のすごさを理解するには、その「空間」を感じて頂きたい。「蕎文」の建物はご主人の今井さんが約2年の歳月をかけて手作業で仕上げたものです。柱、扉、梁、床そして家具に至るまで一つ一つのぬくもりがあり、職人としての「思い」が込められています。その「空間」で戴くそばも鴨鍋も、ここでしか味わえない魅力を持っています。食後に心身ともに癒しの余韻が残るのもこの空間があっただかと思えてきます。ものづくりに拘る真の職人の作る鴨鍋はまさに絶品でした。

TOYAMA EYEBANK NEWS



富山県アイバンク事務局
入江真理

富 山県アイバンクは平成3年、富山大学医学部眼科内に事務局を設置し活動を開始しました。12月末現在までに244名からの尊い献眼を頂き、380名の角膜疾患の患者様が移植手術を受けておられます。ドナー並びにそのご家族の意思を最大限に尊重し、コーディネートが24時間365日体制で対応しております。富山大学附属病院をはじめ県内の公的病院5病棟の先生方に摘出のご協力を頂いています。ドナー角膜は当バンクの医学基準に基づいて評価し、レシピエントにあつせんしております。ドナー数は全国でも上位にあり、すべての患者様が1年以内に移植を受けられる状況になっています。富山大学附属病院に角膜内皮移植の機器を設置し、レシピエントの症例に応じてあらゆる術式に対応できる体制を取っております。献眼して頂いた方の真心に応えるべく、角膜移植により視力を取り戻すことができる患者さまの為に今後より一層の支援を賜りますようお願い申し上げます。



公益財団法人 富山県アイバンク
〒930-0194 富山市杉谷2630番地 富山大学医学部眼科内
TEL. 076-434-5710 FAX. 076-436-0146

<http://www.toyama-eyebank.com>

眼科医の つぶやき。



ますだ眼科医院 院長
升田義次さん



〒930-0033 富山市元町1-2-11 TEL.076-425-1633

50年の眼科医人生、一番の荒波

私

が眼科を志したのは金沢大学医学部の4年生、今の6年生の時に右眼黄斑出血を起したのが理由である。それはテニスの試合の直後に起きた。しかし原因は不明である。大学病院の眼科で治療を受けたが、当時の治療は高調食塩水の結膜下注射とヨードカリ水の内服であった。主治医は前富山県眼科医会長の故片口保一先生であった。幸い、ごく軽い変現症を残して3ヵ月程で治癒したが、当時は眼底カメラもなく、その詳細を知る由もない。

現在であつたらOCTで診断され、アバスチンでも注射されていたかも知れない。

眼科学の進歩には目覚しいものがある。私の若い頃と今の若い先生との必須勉強量は10倍も差があるように思われる。同情を禁じ得ない。

私の50年の眼科医人生の中で一番の荒波は顕微鏡手術の導入であった。若い眼科医の方々がいとも簡単に顕微鏡を使いこなすのを見て羨ましく思ったものである。最近ではOCTの出現に本当に驚かされた。OCTなしでは人並みの診察は出来ないのではないか、とさえ思われる。ただOCTがまだ非常に高価なのが問題である。総合病院でもなかなか導入してもらえないと聞く。早く手頃な値段になることを願っている。